

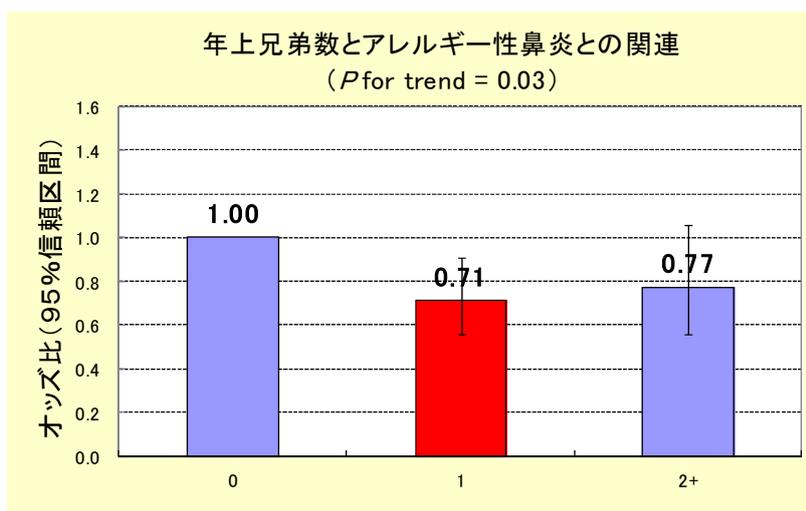
九州・沖縄母子保健研究ベースラインデータの結果 兄弟数とアレルギー性疾患有症率との関連

背景：これまで多くの研究で、兄弟数とアレルギー性疾患との間に負の関連が報告されていますが、その生物学的なメカニズムはわかりません。日本人の成人ではこの関連に関する疫学研究によるエビデンスはありません。

方法：九州・沖縄母子保健研究のベースライン調査に参加した 1745 名の妊婦さんを対象としました。European Community Respiratory Health Survey に基づき、過去 1 年の喘鳴と喘息を定義しました。International Study of Asthma and Allergies in Childhood に基づき、過去 1 年のアトピー性皮膚炎とアレルギー性鼻結膜炎を定義しました。年齢、居住地域、喫煙、受動喫煙、アレルギー性疾患の家族歴、家計の年収、教育歴を交絡因子として補正しました。

結果：過去 1 年の喘鳴、喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻結膜炎の有症率は各々 10.4%、5.5%、13.0%、25.9% でした。年上の兄弟数とアレルギー性鼻結膜炎有症率との間に有意な負の量-反応関係を認めましたが、年上兄弟数 0 名に対する 2 名以上での補正オッズ比は統計学的に有意ではありませんでした。年上兄弟数と喘鳴、喘息、アトピー性皮膚炎有症率とは関連がありませんでした。総兄弟数及び年下兄弟数とは、いずれのアレルギー性疾患有症率とも関連を認めませんでした。

結論：年上の兄弟数とアレルギー性鼻結膜炎有症率との間に負の関連を認めました。この知見は胎内プログラミング仮説を支持するかもしれませんが、決して衛生仮説を否定するものではありません。



出典： Miyake Y, Tanaka K, Arakawa M. Sibling number and prevalence of allergic disorders in pregnant Japanese women: baseline data from the Kyushu Okinawa Maternal and Child Health Study. BMC Public Health. 2011; 11: 561.